9

適塾の塾頭　松下元芳の系図について——福沢諭吉の一代前の塾頭で親友の筑後久留米藩医——

中山茂春
緑風会　水戸病院

筑後久留米藩医松下元芳は、嘉永七年（一八五四）五月七日に適塾に入門している。安政三年（一八五六）に塾頭となり、その年の秋に帰藩している。松下元芳の一代後に福沢諭吉が塾頭となっている。福沢諭吉は「福翁自伝」の中の緒方の塾風の項で松下元芳との思い出話を次のように述べている。

「私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳という医者と二人連れで、御霊という宮地に行って夜見世の植木を冷やかしている中に、植木屋が『旦那さん、悪さをしてはいけません』と言ったのは、吾々の風体を見て万引をしたという意味だから、サア了簡しない。まるで弁天小僧みたいに捏繰り返した。『何でもこの野郎を打ち殺してしまえ』と私が怒鳴る。松下は慰めるような風をして『マア殺さぬでも宜いじゃないか』『ヤア、面倒だ。一打ちに打ち殺してしまうから止めなさんな』と、それこれするうちに従来の人は黒山のように集まって大混雑になって来たから…」

松下と福沢は同胞のように仲が良かったと伝えられている。大阪の生活においては、勉学においても遊びにおいても二人で過ごす時間が多かったようである。後に福沢諭吉が慶応義塾を創設、松下は英学の勉強に慶応に赴くが、福沢は入塾者としての扱いではなく、賓客として扱ったと伝えられている。

緒方洪庵が福岡藩の武谷祐之（椋亭）に宛てた手紙が残っている。武谷祐之は天保十四年（一八四三）に適塾に入門している。適塾より帰藩した武谷椋亭の意見で創立された福岡藩の医学校である賛生館が後の九州大学医学部の渕源となるのであるが、この武谷椋亭に対して緒方洪庵は安政四年（一八五七）十二月二十日附の手紙にこう記している。「久留米之松下君当秋より帰国いたし居候、同人は急度御役に相立候人物に御

座候。何卒洋学之事に付御用之事も候はば同人へ御相談有之候而も可宜と奉存候」。

これを見ると緒方洪庵がいかに松下元芳を信頼していたかが窺える。

この松下元芳については私が日本医史学雑誌第四十四巻第三号（平成十年九月）「適塾の塾頭をした筑後久留米藩医松下元芳」資料として投稿致しました。

家系の中には、松下元芳の実弟で適塾に入門した松下済民、又、松下元芳と同じく筑後久留米藩医中山元琳（松下元芳とはいとこ同士）らがいます。中山元琳は同じく奥詰医師で、明治三年から四年にかけて藩命により鹿児島医学校にいた英医ウィリアム・ウィリスの元に遊学しています。私はこの中山家の傍系に当たりますが、私の伯父中山弘道（元九大第一内科同門会長）は日本医史学会の名誉会員だった王丸勇先生（久留米大学精神科名誉教授）と九帝大の同級生で親友でした。又、私の伯父鳥巣太郎（元九州帝国大学医学部第一外科助教授）は大東亜戦争中の九帝大米軍捕虜生体解剖事件に関与して、戦犯として巣鴨刑務所に服役しました。（当初の判決は絞首刑、後に減刑となる）鳥巣太郎家の次男鳥巣岳彦医師は九大卒後、日本医史学会会員の小林晶先生の御指導を受けて、後に大分医科大学教授（整形外科）、大分医科大学長、大分大学医学部長を歴任しました。

これらの人々は同じ系図の中にありますが、先般の資料を投稿した際に、松下家の系図に関しては篠原正一著「久留米人物誌」から引用いたしました。篠原正一氏は福岡県明善高校（旧筑後久留米藩の藩校が渕源）の国語・漢文の教論をされておられた先生で、非常に正確な資料の本でありましたので、そのまま引用いたしました。ところが郷土史家の古賀幸雄氏（ＮＨＫの歴史への招待にも出た方）から、系図の間違いを指導されましたので、修正した系図の御報告と共に、家系の範疇に入る、九大捕虜生体解剖事件の鳥巣太郎氏や、その家族の写真等も披露したいと考えます。